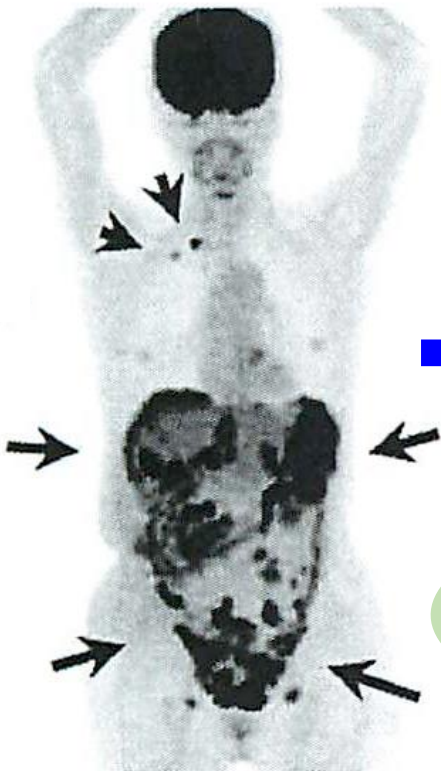


50歳代女性の卵巣癌外科手術後に再発
他の病院で標準治療を受けてきたが効果がなく当院を受診
腹腔内抗がん剤治療(単独で15回)を施行

治療前

治療7ヶ月後



少しがんが残っているが
明らかに癌が減っている



CA125 304 約1/24 12.6 ※基準値35以下

※健常な方でも脳、心、腎、膀胱には集積が見られます

使用薬剤	以前より人体への腹腔内投与の安全性が確認されている抗癌剤を（主にタキサン系抗癌剤、白金系抗癌剤など）、患者の当日の病状に応じて、抗癌剤の種類と投与量を決めています。
頻度	7-28日毎（症状により治療間隔に変動あり）
副作用	抗癌剤に対するアレルギー症状（皮疹、胸痛、発汗、吐き気、嘔吐など） 骨髓抑制（各種血球の減少に伴う易感染性、貧血、血小板減少による出血傾向） 手足の痺れ、関節や筋肉の痛み、下痢、便秘、脱毛、間質性肺炎、口内炎、腎機能障害 聴力障害、肝機能障害、吃逆など ※全身化学療法に比べ投与量が少量のため副作用が起こる確率は低いものの、上記抗癌剤に伴う副作用が出現することがあります。 ※全身抗癌剤治療とは異なる、腹腔内抗がん剤治療に起こりやすい特徴的副作用として、腹部不快感、軽度腹痛、便秘、下痢などが出現することがありますが、一過性で軽症です。治療が必要になるような中等度以上の副作用は極めて稀です
医薬品医療機器等法上の承認について	上記薬剤は国内において静脈投与に限り、医薬品医療機器等法に基づく承認を受けています。 しかし、その他の投与方法では、現時点では承認されていません。
諸外国における安全性	諸外国でも静脈投与において承認されていますが、経口投与や皮下投与における安全性についての十分なデータは得られていません。 特に、欧米においても同様に、静脈投与以外での使用に関する臨床データや有効性に関する報告は限られています。これらの投与方法に関しては、未承認の状態が続いており、安全性が確立されていないため、使用には十分な注意が必要です。
治療費用	腹腔内抗がん剤治療15回（※1回あたりの抗がん剤治療の費用は96000円）

腹腔内抗癌剤治療は腹膜播種病変の制御には有効ですが、全身に広がっている癌に対しては大きな効果は期待できません。腹腔内抗癌剤治療以外の治療も必要と考えられる患者さんには、患者さんの癌の分布に最適と思われる治療を、当院と治療連携している腫瘍内科医、外科医、脳外科医、泌尿器科医、婦人科医、放射線治療医など各分野の専門医に相談・紹介して、個々の患者さんにとって、その時その時にベストと思われる連携治療を推薦させていただいております。

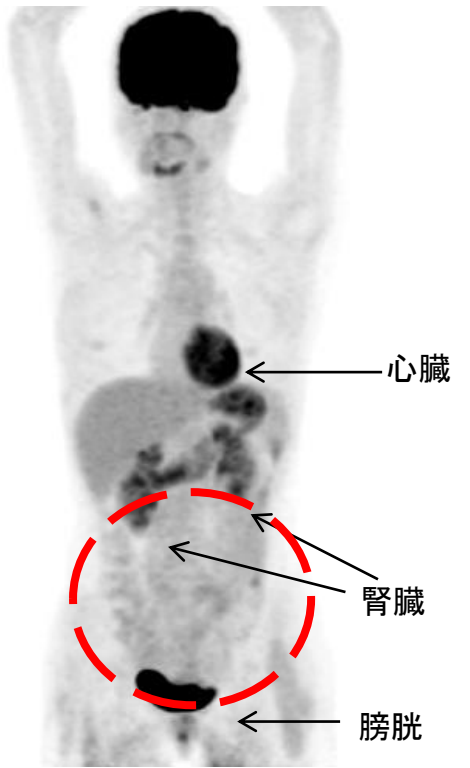
30歳代女性、卵巣癌外科手術5年後の再発。他の病院で、抗がん剤治療を受けてきたが腹膜播種の悪化、腸閉塞(イレウス)症状で当院へ受診。腹腔内抗がん剤治療(15回)と全身抗がん剤(10回)を併用し、腹膜播種はほとんど消失した。

治療前

治療7ヶ月後



治療開始1ヶ月で
食事が可能に



※全身化学療法は他院で施行

CA125

2761



6 (約460分の1)

※基準値35以下

※健常な方でも脳、心、腎、膀胱には集積が見られます

使用薬剤	以前より人体への腹腔内投与の安全性が確認されている抗癌剤を（主にタキサン系抗癌剤、白金系抗癌剤など）、患者の当日の病状に応じて、抗癌剤の種類と投与量を決めています。
頻度	7-28日毎(症状により治療間隔に変動あり)
副作用	抗癌剤に対するアレルギー症状（皮疹、胸痛、発汗、吐き気、嘔吐など） 骨髓抑制（各種血球の減少に伴う易感染性、貧血、血小板減少による出血傾向） 手足の痺れ、関節や筋肉の痛み、下痢、便秘、脱毛、間質性肺炎、口内炎、腎機能障害 聴力障害、肝機能障害、吃逆など ※全身化学療法に比べ投与量が少量のため副作用が起こる確率は低いものの、上記抗癌剤に伴う副作用が出現することがあります。 ※全身抗がん剤治療とは異なる、腹腔内抗がん剤治療に起こりやすい特徴的副作用として、腹部不快感、軽度腹痛、便秘、下痢などが出現することがありますが、一過性で軽症です。治療が必要になるような中等度以上の副作用は極めて稀です
医薬品医療機器等法上の承認について	上記薬剤は国内において静脈投与に限り、医薬品医療機器等法に基づく承認を受けています。 しかし、その他の投与方法では、現時点では承認されていません。
諸外国における安全性	諸外国でも静脈投与において承認されていますが、経口投与や皮下投与における安全性についての十分なデータは得られていません。 特に、欧米においても同様に、静脈投与以外での使用に関する臨床データや有効性に関する報告は限られています。これらの投与方法に関しては、未承認の状態が続いており、安全性が確立されていないため、使用には十分な注意が必要です。
治療費用	腹腔内抗がん剤治療15回(※1回あたりの抗がん剤治療の費用は96000円)

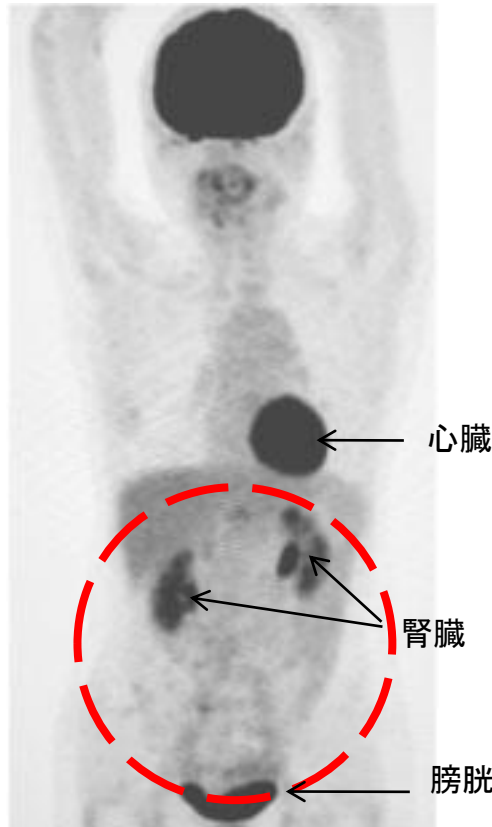
腹腔内抗癌剤治療は腹膜播種病変の制御には有効ですが、全身に広がっている癌に対しては大きな効果は期待できません。腹腔内抗癌剤治療以外の治療も必要と考えられる患者さんには、患者さんの癌の分布に最適と思われる治療を、当院と治療連携している腫瘍内科医、外科医、脳外科医、泌尿器科医、婦人科医、放射線治療医など各分野の専門医に相談・紹介して、個々の患者さんにとって、その時その時にベストと思われる連携治療を推薦させていただいております。

50歳代の女性、卵巣癌外科手術後の再発で受診
腹腔内抗がん剤治療(22回)と全身の抗がん剤治療(5回)
で1年後にほぼ癌が消失

治療前



治療1年後



※脳、腎臓、心臓、膀胱は正常でも黒く映ります

CA125
腹水の量

1809
6.8L

6 (約300分の1)
消失 ※基準値35以下

使用薬剤	以前より人体への腹腔内投与の安全性が確認されている抗癌剤を（主にタキサン系抗癌剤、白金系抗癌剤など）、患者の当日の病状に応じて、抗癌剤の種類と投与量を決めています。
頻度	7-28日毎(症状により治療間隔に変動あり)
副作用	抗がん剤に対するアレルギー症状（皮疹、胸痛、発汗、吐き気、嘔吐など） 骨髄抑制（各種血球の減少に伴う易感染性、貧血、血小板減少による出血傾向） 手足の痺れ、関節や筋肉の痛み、下痢、便秘、脱毛、間質性肺炎、口内炎、腎機能障害 聴力障害、肝機能障害、吃逆など ※全身化学療法に比べ投与量が少量のため副作用が起こる確率は低いものの、上記抗がん剤に伴う副作用が出現することがあります。 ※全身抗がん剤治療とは異なる、腹腔内抗がん剤治療に起こりやすい特徴的副作用として、腹部不快感、軽度腹痛、便秘、下痢などが出現することがありますが、一過性で軽症です。治療が必要になるような中等度以上の副作用は極めて稀です
医薬品医療機器等法上の承認について	上記薬剤は国内において静脈投与に限り、医薬品医療機器等法に基づく承認を受けています。 しかし、その他の投与方法では、現時点では承認されておりません。
諸外国における安全性	諸外国でも静脈投与において承認されていますが、経口投与や皮下投与における安全性についての十分なデータは得られていません。 特に、欧米においても同様に、静脈投与以外での使用に関する臨床データや有効性に関する報告は限られています。これらの投与方法に関しては、未承認の状態が続いており、安全性が確立されていないため、使用には十分な注意が必要です。
治療費用	腹腔内抗がん剤治療22回(※1回あたりの抗がん剤治療の費用は96000円)

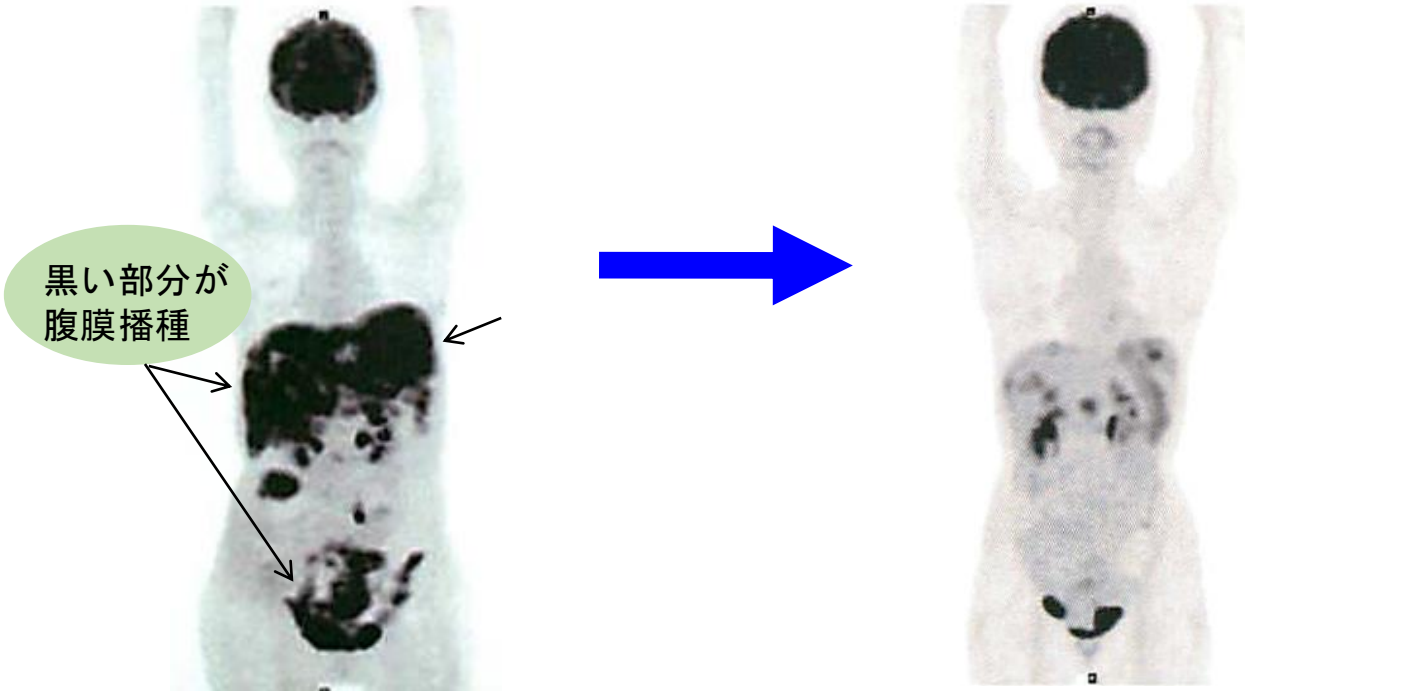
腹腔内抗癌剤治療は腹膜播種病変の制御には有効ですが、全身に広がっている癌に対しては大きな効果は期待できません。腹腔内抗癌剤治療以外の治療も必要と考えられる患者さんには、患者さんの癌の分布に最適と思われる治療を、当院と治療連携している腫瘍内科医、外科医、脳外科医、泌尿器科医、婦人科医、放射線治療医など各分野の専門医に相談・紹介して、個々の患者さんにとって、その時その時にベストと思われる連携治療を推薦させていただいております。

50歳代の漿液性卵巣癌術後再発患者。標準治療の効果に乏しく、緩和医療を勧められ当院へ受診。
腹腔内抗がん剤治療単独11回で腹膜播種が目立たなくなった。

治療前

治療3ヶ月後

腹腔内病変の制御に伴い
全身治療へ移行



CA125
腹水の量

7274
9.2L

300(約24分の1)
消失

※基準値35以下

※脳、腎臓、心臓、膀胱は正常でも黒く映ります

使用薬剤	以前より人体への腹腔内投与の安全性が確認されている抗癌剤を（主にタキサン系抗癌剤、白金系抗癌剤など）、患者の当日の病状に応じて、抗癌剤の種類と投与量を決めています。
頻度	7-28日毎（症状により治療間隔に変動あり）
副作用	抗がん剤に対するアレルギー症状（皮疹、胸痛、発汗、吐き気、嘔吐など） 骨髓抑制（各種血球の減少に伴う易感染性、貧血、血小板減少による出血傾向） 手足の痺れ、関節や筋肉の痛み、下痢、便秘、脱毛、間質性肺炎、口内炎、腎機能障害 聴力障害、肝機能障害、吃逆など ※全身化学療法に比べ投与量が少量のため副作用が起こる確率は低いものの、上記抗がん剤に伴う副作用が出現することがあります。 ※全身抗がん剤治療とは異なる、腹腔内抗がん剤治療に起こりやすい特徴的副作用として、腹部不快感、軽度腹痛、便秘、下痢などが出現することがありますが、一過性で軽症です。治療が必要になるような中等度以上の副作用は極めて稀です
医薬品医療機器等法上の承認について	上記薬剤は国内において静脈投与に限り、医薬品医療機器等法に基づく承認を受けています。 しかし、その他の投与方法では、現時点では承認されていません。
諸外国における安全性	諸外国でも静脈投与において承認されていますが、経口投与や皮下投与における安全性についての十分なデータは得られていません。 特に、欧米においても同様に、静脈投与以外での使用に関する臨床データや有効性に関する報告は限られています。これらの投与方法に関しては、未承認の状態が続いており、安全性が確立されていないため、使用には十分な注意が必要です。
治療費用	腹腔内抗がん剤治療11回（※1回あたりの抗がん剤治療の費用は96000円）

腹腔内抗癌剤治療は腹膜播種病変の制御には有効ですが、全身に広がっている癌に対しては大きな効果は期待できません。腹腔内抗癌剤治療以外の治療も必要と考えられる患者さんには、患者さんの癌の分布に最適と思われる治療を、当院と治療連携している腫瘍内科医、外科医、脳外科医、泌尿器科医、婦人科医、放射線治療医など各分野の専門医に相談・紹介して、個々の患者さんにとって、その時その時にベストと思われる連携治療を推薦させていただいております。

50歳代の子宮頸部腺癌Stage 4bの症例
大学病院にて手術適応無しと判断され、TC療法＋キイトルーダ療法（抗がん剤治療）を1年間で合計14回受けたが、一時的な効果しか見られなかった。

その後腫瘍マーカー上昇、多発リンパ節転移、腹膜播種出現、腹水増加あり。**遺伝子診断を受けたが有効な抗癌剤が無いと判定され、大学病院から緩和ケアを宣告された。**当院に治療を希望して受診。

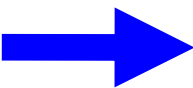
治療前

治療3ヶ月後

腹腔内治療10回
全身抗癌剤化学療法3回

※全身化学療法は他院で施行

腹水細胞診陽性
子宮頸部細胞診腺陽性
子宮内膜細胞診腺陽性



腹水細胞診陰性
子宮頸部細胞診陰性
子宮内膜細胞診陰性
PET-CTで異常集積を認めず

腫瘍マーカー
CA125

2325



33

※基準値35以下

腹水の量

1.6L



消失

使用薬剤	以前より人体への腹腔内投与の安全性が確認されている抗癌剤を（主にタキサン系抗癌剤、白金系抗癌剤など）、患者の当日の病状に応じて、抗癌剤の種類と投与量を決めています。
頻度	7-28日毎（症状により治療間隔に変動あり）
副作用	抗がん剤に対するアレルギー症状（皮疹、胸痛、発汗、吐き気、嘔吐など） 骨髓抑制（各種血球の減少に伴う易感染性、貧血、血小板減少による出血傾向） 手足の痺れ、関節や筋肉の痛み、下痢、便秘、脱毛、間質性肺炎、口内炎、腎機能障害 聴力障害、肝機能障害、吃逆など ※全身化学療法に比べ投与量が少量のため副作用が起こる確率は低いものの、上記抗がん剤に伴う副作用が出現することがあります。 ※全身抗がん剤治療とは異なる、腹腔内抗がん剤治療に起こりやすい特徴的副作用として、腹部不快感、軽度腹痛、便秘、下痢などが出現することがありますが、一過性で軽症です。治療が必要になるような中等度以上の副作用は極めて稀です
医薬品医療機器等法上の承認について	上記薬剤は国内において静脈投与に限り、医薬品医療機器等法に基づく承認を受けています。 しかし、その他の投与方法では、現時点では承認されていません。
諸外国における安全性	諸外国でも静脈投与において承認されていますが、経口投与や皮下投与における安全性についての十分なデータは得られていません。 特に、欧米においても同様に、静脈投与以外での使用に関する臨床データや有効性に関する報告は限られています。これらの投与方法に関しては、未承認の状態が続いており、安全性が確立されていないため、使用には十分な注意が必要です。
治療費用	腹腔内抗がん剤治療10回（※1回あたりの抗がん剤治療の費用は96000円）

腹腔内抗癌剤治療は腹膜播種病変の制御には有効ですが、全身に広がっている癌に対しては大きな効果は期待できません。腹腔内抗癌剤治療以外の治療も必要と考えられる患者さんには、患者さんの癌の分布に最適と思われる治療を、当院と治療連携している腫瘍内科医、外科医、脳外科医、泌尿器科医、婦人科医、放射線治療医など各分野の専門医に相談・紹介して、個々の患者さんにとって、その時その時にベストと思われる連携治療を推薦させていただいております。